

スメタナ「我が祖国」での国際会議

高部英明

チェコ航空でアムステルダムからプラハに着いた(27日夜)。着陸時、「我が祖国」が機内に流れる。長く支配下にあった民族の熱い気持が伝わってくる。

大阪から4人、アムステルダムから10人近くの日本人(会議参加者)の団体となった。28日は、時差調整を兼ねて市内を歩き回った(2万3千歩)。むかし(80-81年)住んでいたミュンヘンに雰囲気の似た、落ちついたいい町だ。旧市庁舎広場で若者と一緒に座っていると時間の経つのを忘れる。天気予報では雨のはずが、会議最終日までとてもいい青空の日が続いた。

会議(ICPP:国際プラズマ物理議会、CはCongress)参加者約千人。1200の論文投稿(内850の受理)、250の招待講演推薦(内75の受理)ときびしい前審査があったとか。会期5日間(6/29-7/3)午前前半(8:30-10:00)に45分の特別講演2件。そのあと3セッションに分かれ招待講演、850件はポスターというマンモス会議である。私は"Recent Progress on Laser Produced Plasma"と題して水曜朝一の特別講演を行った。座長が飯吉・核融合研所長。私の次が米国ITER推進派の大ボスMarshall Rosenbluth。彼の話は「ITERの3-D問題(Disruption, Divertor, Dollars)」。

会議はJETのDT実験の報告で始まった。イオン温度28keVで核反応が2秒間続き、22メガジュールの出力、 $Q = 0.9$ (ほぼ臨界)を達成している。ランダウ減衰、最近はやりのダストプラズマ、太陽フレア、異常輸送理論、RFPやSpherical Tokamakの話題。中には、ニュートリノの集団効果で超新星爆発時の物質が受ける力が 10^{10} 倍強くなる、という信じがたい話(あのノーベル賞学者ハンス・ベエテと共著とは、どこがおかしい)もあった。

最終の金曜日、「Future Direction of Plasma Science」というシンポジウムがあり、Rosenbluthが座長で10人の発表と会場との討論があった。私は座長から「お前、パネラーに加われ」と水曜日に言われ、組織委員長のTendlerから「個人的な発言でいいから10分、話してくれ」と2時間前に言われ、OHP4枚用意し、しゃべった。10人の話や討論を通して主題となったのは「いかにして優秀な学生をプラズマ分野に引き付けるか」、「ITERはpipe-dreamか、promisingか?」、「他の分野との交流をもっと積極的に」、等。ところが「金がなければ学生がこない。どうすれば核融合のインフラを増やせるかを討論する場ではなかったのか」といった心淋しくなるような意見が老研究者から出るなど、私にとってはshockingな内容の話も多かった。これが今の核融合の現実か、欧州にしてこうか、と改めて思い知らされた所もあった。日本から50人以上の参加者があったが、このシンポジウムで討論された内容の解釈は、その人の立場や見解で異なるであろう。

児玉君のfast ignitionの話はなかなか迫力があつた。英国のBoydさんもほめていた。会議で一番印象に残ったのは、火曜夜、聖ヤコブ教会でのProf. M.G. Hainesのパイプオルガン・コンサート。一点の失敗も許されない一時間の緊張。彼(10年前センターに3ヶ月いた)の生演奏を聞いて、「明朝の私の発表など、取るに足らぬ緊張の世界」と大いに勇気づけられた。

今度の会議で、又、色々な方と知り合いになれた。片道40分、徒歩での会場通いで町の印象が心に残り、旧市庁舎広場のフス像の階段の冷たい座り心地が、あのカラリとした天気、強い日差しと共に、レーザー研での雑々とした生活の疲れをとってくれたような気がした。